

# 「Tumor Dormancy Therapy

## 癌治療の新たな戦略

金沢大学がん研究所助教授 高橋 豊 著

(財)札幌がんセミナー

小 林 博

がんの治療はいま、大きな変革の時期にある。今までのがん治療の狙いはがん細胞をできるだけ叩くという事で、がんの塊りが縮小すればするほど効果があったと考えられてきた。事実、がんの化学療法はそのような狙いのもとに開発され、それなりの成果を挙げた。

しかしながら、多くのがん患者は強い副作用に悩んできたことから考えると、これが果して理想的な延命効果として評価してよいかとなると疑問の余地があった。

このようながんの治療のあり方に対する反省の念は、早くから本書の著者高橋豊博士らが指摘していた。ときを同じくしてこのような動きは欧米においてもみられたのである。いずれも共通していままでのがんの治療に対する反省であった。

以上の経緯を踏まえ、これからの最も望ましいがんの治療の理念と実際の詳細を報告したのが本書である。このような狙いで新たながん治

療戦略を綴った解説書は本書をもって始めると言っていいてであらう。

本書の狙いは、がんの治療効果はいいQOLの状態ですできるだけ長生きさせるということである。それに伴ってがんの縮小があればそれに越したことはない。しかし決してがんの縮小を第一の目標としてはいけないという精神によって貫かれている。

近年、がん患者の延命効果は非常に期待できるようになった。抗がん剤に対する副作用対策、あるいはがん患者の看護の改善によるところが大きい。更には感染症対策など、がんを殺すこと以外の周辺のケアに関する対策の進歩を見逃すわけにはいかない。

更に血管新生阻害剤というものが登場してきた。がんの栄養を補給する毛細血管の提供を阻害し間接的にがんの増殖を抑えようというものである。このようなものは従来の化学

療法にみられたような副作用はない。

がんの化学療法でもその少量頻回投与などの工夫がされ、がんの縮小効果とか明らかな延命効果(少なくともQOLを損なわない)のみられることがあるとわかってきた。

がんの治療は患者のためにあるのであって、医療者側の単に学問的な興味に基づくものであってはならない。がんの治療の原点に振り返るとき、いままでのがんの治療に対する反省とともに、がん患者のケアを中心にした新たながん治療が大切であり、これらのすべてが高橋博士のドーマントセラピー(休眠療法)というものの中に包括されている。その詳細は本書をひもといて知って戴くことを希望する。期待は必ず報いられると信ずる。

● A5 頁192 図82 カラー写真3表33 2000  
定価(本体3,800円+税) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)